

闘争

小酒井不木

青空文庫

K君。

親切な御見舞の手紙うれしく拝見した。僕は全く途方に暮れてしまった。御葬式やら何やら彼^かやらで、随分忙^{せわ}しかったが、やっと二三日手がすいて、がっかりした気持ちになって居るところへ君の手紙を受取り、涙ぐましいような感激を覚えた。君の言うとおりに、毛利先生を失ったわが法医学教室は闇だ。のみならず、毛利先生を失ったT大学は、げっそり寂しくなった。更に、また毛利先生を失った日本の学界は急に心細くなった。さきに狩尾^{かりお}博士を失い、今また毛利先生の訃^ふにあうというのは、何たる日本の不幸事であろう。毛利先生と狩尾博士とは、日本精神病学界の双璧であつたばかりでなく共に世界的に有名な学者であつた。その二人が僅か一ヶ月あまりのうちに相次いで病死されたということは、悲しみてもお余りあることである。

K君。君は僕の現在の心持ちを充分察してくれるであろう。何だか僕も先生と同じく肺炎^かに罹^かつて死にそうな気がしてならぬ。かつて中学時代に父を失ったとき、その当座は自分も死にそうに思ったが、その同じ心持ちを今しみ／＼感ずるのだ。教室へ出勤しても何も手がつかぬ。幸いに面倒な鑑定がないからいゝけれど、若^もしむずかしい急ぎの鑑定で

も命ぜられたら、どんな間違いをしないとも限らない。家に帰ってもたゞぼんやりとして居るだけだ。それで居て、何かやらずに居られないような気分には迫られても居るのだ。若し僕に創作の能力があつたら、きつと短篇小説の二つや三つは書き上げたにちがいない。けれども残念ながら、それは僕には不可能事だ。たゞ幸いに手紙ぐらゐは書けるから、今晚は君に向つて、少し長い手紙を御返事かた／＼書こうと思う。

君の手紙にも書かれてあるとおり、毛利先生は最近たしかに憂鬱だつた。君ばかりでなく、他の友人たちも、それを気づいて、すぐに先生の生前に、僕にたゞねた者がある。僕には先生の憂鬱の原因、ことに死の直前一ヶ月あまりの極端な憂鬱の原因はよくわかつて居た。けれども、先生が生きて居られる限りはその原因を僕は絶対に人に語らぬつもりだつた。けれども、今はもうそれを語つてもよければかりでなく、また語らずには置けぬ気がするのだ。で、それについてこれから出来るだけ委しく書こうと思う。

それから今一つ、話の序に、君が嘸聞きたがつてゐるだろうと思う、例の新聞広告、とだしぬけに言つたのではわかるまいが、今から一ヶ月半ほど前に、都下の主な新聞の三行広告欄へあらわれた不思議な広告

P M b t D K

の種明しをもしようと思う。こう言うと、君は定めし不審に思うだろうが、あの広告は、実は僕が出したものだ。君よ、驚いてはいかぬ。詮索好きの君は、あの当時、よく僕の教室へ来て誰が、何のために出して、どういう意味があるだろうか、色々推定を行^やつてきかせてくれたものだ。僕は君に感附かれないように、つとめて知らぬ顔を装って居たのだが、あれこそ、先生の憂鬱の原因と関係があつて、その当時は絶対の秘密を要したことだから、僕は自分ながら感心するほど、よく自制したよ。が、今はそれを自由に物語る事が出来るのだ。君も、きつと喜ぶだろうが、僕もうれしい気がする。

K君。

君はよく記憶して居るだろう。郊外Mに文化住宅を構えて居た若き実業家北沢栄二の自殺の一件を。一旦自殺として埋葬されたのを、警察の活動によって、未亡人政子と^{まさこ}その恋人たる文士緑川順が、他殺の嫌疑で拘引され、死骸の再鑑定をすることになったが、鑑定の結果、やはり自殺と決定されて二人は放免され、事件は比較的平凡に片づいてしまった。あの鑑定は主として僕がやったけれど、実はあの事件の底には、もつとく奥深いものがかくされて居て、それがやがてあの謎の広告と密接な関係を持って居るのだ。というところ、察し深い君は、あの事件がやはり他殺だったのかと思うであろう。そうだ。思い切つて言

えば、やはり一種の他殺だったのだ。が、それはたしかに普通の場合とは異って居るので、それがあの謎の広告となったのだが、とに角、こういう訳で、毛利先生の憂鬱の原因は、間接に北沢事件だとも言い得るのだ。

尤もそれは先生の死の直前の極度の憂鬱のことをいうのであって、すでにその以前から、毛利先生は憂鬱だったのだ。僕はちようど五年間先生に師事したが、最初の四年間先生は文字通り快活で、疲労というものを少しも知らぬ学者だった。五十を越した人と思われぬ黒い髪と、広い額と窪んだ眼と、かたく結んだ唇とは、見るからに聡明な性質を表わして居たが、ことに先生が、法医学的の、又は精神病学的の鑑定を行われる態度は、襟えりを正しくせずに居おられぬほど厳肅なものだった。それもその筈だ。先生の鑑定の結果は、単に一個人の生命に係するばかりでなく、社会にも重大な影響を与えるから、いわば人智の限りを使い尽たすして携たずわられたのである。而も、しか、そうした義務的観念から熱心であつたばかりでなく、心からの興味をもつて従事されたのである。

ところが過去一ケ年ほど、どうした訳か先生は、以前ほど仕事に興味を持たれなくなつた。どんな小さな鑑定にも、必ず自分の息を吹きかけねば気の済まなかつた先生が、近頃はほとんど我々助手に任せきりだった。任せきりだとはいうものゝ、鑑定書には必ず眼を

とおされ、助手の手にあまるような問題には決して労力を惜まれなかったが、どう観察しなおしても、以前ほどの熱はなく、教室でぼんやり時を過されることが度々であった。後進を引き立てるために、わざと手をつけることを差控えるようにせられたのかとも思つて見たけれど、決してそうばかりではなかった。というのは、先生の顔にだん／＼憂鬱の影がさして来たからである。

僕ははじめ先生の憂鬱の原因を、何か先生に、世間普通の心のなやみが生じたためではないかと考えたよ。甚だ失礼ながら、^{はなは}独身の先生のことだから、恋愛問題にでも直面されたのではないかと思つて見た。もちろん今はその邪推を後悔して居るが、とに角、一時はそうとでも考えるより他はなかつたのだ。ところが、だん／＼観察を深めて行くと、それが全部ではないけれど、一種の倦怠とも見るべき状態だとわかつたのだ。どうもこの倦怠という言葉は甚だ坐りが悪いけれど、他によい言葉がないから、致し方なく使用するのだが、いわば、精神活動の一種の弛緩^{しかん}状態を意味するのだ。

生理学を専攻する君に、こんなことを言うのは僭越だが、心臓の血圧の曲線を観察すると、かのトラウベ・ヘーリング氏の弛張^{しちよう}がある。心臓は生れてから死ぬまで搏動を続けて居なければならぬから、一対ずつ存在して居る器官、例えば腎臓のように、一方の活動

して居る間、他方が休むという訳にいかぬ。それで活動に弛張しちやうを来きたし、それが所謂いわゆるト
ラウベ・ヘーリング氏の弛張と名づけられて居るが、僕は精神的活動にも同様なことがあ
り得ると思うのだ。平凡な働きしか出来ぬ脳髓には弛張は目立たぬけれど、精神的活動が
はげしければはげしいほど、緊張状態の後に来る弛緩状態が目立って来ると考えるのだ。

僕は嘗てこの見地のもとに、史上の俊才の伝記を研究したことがある。果して多くの俊才
には、精神的活動期の中間に著しいギャップのあることがわかった。古来の伝記学者たち
はそのギャップを色々に説明して居るが、要するに、それは生理的に、いわば自然に生ず
るものであって、俊才自身が意識してそのギャップを作ったのではないのだ。そうしてそ
の時期にめぐり合せた俊才たちは、きまつて憂鬱になるのだ。著しかった精神活動の時期
を回顧して、だん／＼深い憂鬱に陥おちこんで行くのだ。

時には肉体的の欠陥がこの弛緩状態を起すことがある。肺結核の初期には却つて精神的
活動を促すが、後にはやはり弛緩状態を起すらしい。慢性腎臓炎などは弛緩が著しい。そ
こで僕は先生が何か病気に罹かられたのではないかとも思つたことがあるけれど、やはりそ
うではなく、俊才に生理的に起る憂鬱状態と見るのが至当だったのだ。

今になつて見れば、もつと他の、学者としては最も当然な、且かつ最も高尚な悩みもあつ

たのだが、それはむしろ原因ではなくて、単にその時期に併^{へいざい}在したと見るのが至当であろう。いずれにしても、毛利先生は、先生自身でもどうにもならぬ、況^{いわ}んや僕等の何とも仕ようもない憂鬱に陥つてしまわれたのである。

ところが、その憂鬱からはからずも脱し得られるような事情が起つたのだ。後から見ればそれが一時的のものであつて、毛利先生はその後更にはげしい憂鬱に陥られたが、若し、先生の論敵で、先生と共に、日本精神病学界の双璧といわれて居る狩尾博士が脳溢血で頓^{とん}死^しされなかつたら、あのまゝ従前の活動状態に復帰されたかも知れぬ。そうして、ことによつたら、先生の死もこれほど早くには起らなかつたかも知れぬ。が、今はもう悔んでも及ばない。又、僕の愚痴をならべて君を退屈させても相済まぬ。で、先生を一時的に憂鬱から救つた事情を早く物語ろうと思う。言う迄もなく、それが即ち、北沢事件なのである。

K君。

北沢事件は、その当時、新聞に委^{くわ}しく報ぜられたから、君も大体は知つて居るであろう。三十七歳の実業家北沢栄二は郊外に、文化住宅を建て、夫人政子と二人きりで、全然西洋式に暮して居たのだが、今から二月前の十月下旬のある日、夫人の留守中に書齋でピストル自殺を遂げた。その日夫婦は午後一時に昼食をとり、それから間もなく夫人は買物に出

たが、色々手間どつて五時半頃に帰ると、良人は書斎の机の前に椅子と共に、床の上に血に染まって死んで居たので、驚いて電話で警察へ報じたのである。

取調べの結果、机の上には遺書と見るべきものが置かれてあつて、他殺らしい形跡が毫も認められなかつたので、翌日埋葬を許可された。普通ならば火葬にさすべきであるのに、特に埋葬にせしめたのは、遺書と見るべきものが、本人の自作の文章ではなくて、本人の自筆ではあるけれど、先年自殺した青年文学者A氏の「或旧友へ送る手記」の最初の一節をそのまま引き写したものだつたからである。つまり警察では、そこに後日の研究の余地を存せしめて置いたのだ。

すると果して約一ヶ月の後、警察へ投書があつた。それは「北沢栄二の死因に怪しい点がある」とのみ書かれたハガキであるが、それがため警察がひそかに未亡人を監視すると、未亡人は、緑川順という年若き小説家の愛人があるとわかり、愛人の家宅を突然搜索すると、ちやうど北沢が自殺に用いたと同じピストルが発見され、なお当然のことであるが、「遺書」の載つて居るA氏の全集もあつたから、警察は謀殺の疑いありとして、未亡人と緑川とを拘引し、死骸の再鑑定を僕等の教室へ依頼して来たのだ。

鑑定の依頼に来たのは、警視庁の福間警部だつた。僕等にはお馴染の人である。僕は警

部から鑑定の要項と一切の事情とをきゝ取つて、発掘して運ばれた死体を受取り、福間警部をかえして毛利先生の部屋をたずねたのだった。その日は今にも雨の降りそうな、変に陰鬱な天気だったせいもあるが、先生の顔には常にならないほどの暗い表情が満ちて居た。僕が書類を手にしてはいって行くと、先生は読みかけた雑誌をそのままにして顔をあげ、

「また鑑定かね？」と、吐き出すように言われた。

「はあ」

「どんな」

そこで僕は、福間警部からきいた一切を物語つたが、一年前ならば、眼を輝かして聞かれたであろうに、而も自殺か他殺かという鑑定の結果によつては二人の生命が左右されるほどの重大な事件であるのに先生はたゞフン、フンといつてうなずかれるだけで、悪くいえば、まるで他事を考えて居られるのではないかと思われるような、味気ない態度であった。僕が語り終ると、

「それで、鑑定の事項は？」

「三ヶ条です。第一は胃腸の内容から、死の起つた時間を決定すること。第二は現場及び遺書の血痕が自然のものか、又は人工的に按排された形跡があるか否や、第三はピスト

ルが、どれほどの距離で発射されたかと言うのです」

「その遺書をそこに持つて居るかね？」

僕は紙袋に入れられた遺書を取り出して、先生に差出した。それは二つに折られた水色のレター・ペーパーで、外側には数個の血痕が附着し、中側にペンで「或旧友へ送る手記」の最初の一節が書かれてあった。くだいようであるけれども、後の説明のために、その全文を書いて置こう。

誰もまだ自殺者自身の心理をありのままに書いたものはない。それは自殺者の自尊心や或は彼自身あるいに対する心理的興味の不足によるものである。僕は君に送る最後の手紙の中に、はつきりこの心理を伝えたいと思つてゐる。尤も僕の自殺する動機は特に君に伝えずとも善よい。レニエは彼の短篇の中に或自殺者を描いてゐる。この短篇の主人公は何のために自殺するかを彼自身も知つてゐない。君は新聞の三面記事などに生活難とか、病苦とか、或は又精神的苦痛とか、いろいろの自殺の動機を発見するであらう。しかし僕の経験によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は動機に至る道程を示してゐるだけである。自殺者は大抵レニエの描いたように何の為に自殺するかを知らないであらう。それは我々の行為するように複雑な動機を含んでい

る。が、少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。君は或は僕の言葉を信用することは出来ないであろう。しかし十年間の僕の経験は僕に近い人々の僕に近い境遇にいない限り、僕の言葉は風の中の歌のように消えることを教えている。従つて僕は君を咎めない。……

先生はそれでも、この文句の全部に眼をとおされたのだった。そうして読み終つてから、「この筆蹟は本人に間ちがないのかね？」と、たずねられた。

「それは間違いないそうです」

言う迄もなく先生は筆蹟鑑定のおーソリチーだ。以前の先生ならば、こうした変つた遺書はきつと興味をひくにちがないのだが、

「そうか」と答えられたゞけであつた。そうして、僕に紙片を返しながら、

「それでは、涌井君、君にこの事件の鑑定をしてもらうことにしよう」と、言い放つて、再び雑誌の方を向いてしまわれた。

あとでわかつたことだが、毛利先生がその雑誌の方へ心を引かれて居られたのも無理はないのだつた。其処には、先般学会で先生が大討論をなさつた狩尾博士の論文が掲載され

て居たからである。ここで序ついでに、僕は毛利先生と狩尾博士との關係を述べて置こう。この二人が日本精神病学界の双璧だったことはすでに述べたが、毛利先生を堂上どうじょうの人にとえるならば、狩尾博士は野人であった。すでにその学歴からが、毛利教授は大学出であるのに、狩尾博士は済生学さいせいがく舎を出てすぐ英国に渡って苦学した人だった。そうして狩尾博士はS区に広大な脳病院を経営し、しかも、どしどし新研究を発表した。その風采も毛利先生は謹厳であつたのに、狩尾博士は禿頭とくとくで、どことなく茶目氣があつた。

更にその学説に至つては全然相反の立場にあつた。毛利先生はドイツ派を受ついで居られたのに、狩尾博士はイギリス、フランス派を受ついで居た。もとより晩年には二人とも外国にも匹儔ひつちゆうを見ないほどのユニツクな学者となつて居て、毛利先生は、先生の所いわゆ謂「脳質学派」を代表し、狩尾博士は博士の所謂「体液学派」を代表して居た。脳質学派とは人間の精神状態を脳質によつて説明するのに反し、体液学派は、体液ことに内分泌液によつて説明するのである。

狩尾博士の体液学派は、内分泌派又は体質派ともよばれるのであつて、狩尾博士の主張するところによれば、すべての精神異常は体質によつて定まるものであつて、而も体質しかなるものは目下のところ人力で之これを如何いかんともすることが出来ない。例えば殺人者たる体質を

有するものは、必ずある時期の間に殺人を行う。故にその時期に入ったことを観察することが出来たならば、僅かの暗示的刺戟によつても殺人を行わせることが出来るというのである。即ち、一見精神健全と思われる人にも、体質の如何によつて恐ろしい犯罪を敢てせしめ得るのだというのであつて、その刺戟を狩尾博士は、これまでの suggestion と混同やれないように incendiarism と名づけたのである。

この説に対して毛利先生は、精神異常は脳質に変化が起つてはじめてあらわれるのであつて、脳質に変化の起らない限り、即ち、精神病的徴候のあらわれない限り、暗示によつて殺人を行わせるごときは絶対に出来ぬと主張されたのである。一般の学会でもこの点について激論があつた。実をいうとその時毛利先生の旗色が幾分か悪かつた。すると、狩尾博士は、

「毛利君如何いかゞです？」と、いかにも皮肉な口調で、幾度も先生に迫つたものだ。けれども、人間に直接実験して見せて貰わないうちは、先生も兜かぶとをぬぐことが出来ない。で、結局はやはり、そのまゝになつて討論はやんだが、その時の狩尾博士の演説が、雑誌に載つて居たので、毛利先生は、鑑定の方よりも、それに余計に氣をとられて居おられたわけである。

K君。

このようにして、北沢事件の再鑑定は僕が引受けることゝなった。僕等の教室では、たとい鑑定の事項が局所的のものでも、必ず全身を精密に解剖することになって居るので、その日直ちに注意深く解剖を行った。その結果、北沢栄二という人は胸腺淋巴体質であることを知った。即ち自殺者に殆んど常に見られる体質だ。それから頭部の銃創と骨折の関係をしらべ、胃腸の内容をしらべたが、その結果、ピストルは右の顛顛から約五センチメートルほど離れたところから発射され、死の時間は昼食後一時間乃至二時間後であることをたしかめた。それから僕は北沢家に出張して現場の模様をしらべ、なお、遺書の上の血痕を検べたが、人工的に按排された形跡は一つも発見することが出来なかつた。

このうち胃腸の内容検査は、色々の面白い事実を教えてください。無論それは事件とは関係のないもので、消化生理の上から見て興味あることだが、とてもその委しいことは今書いて居れぬから、他日教室へ来て鑑定書を見てくれたまえ。いずれにしても、僕の鑑定の結果では、他殺と見るべき根拠は何一つ発見されなかつたのである。

あくる日、僕は、毛利先生の部屋をたずねて、解剖の結果その他を逐一報告した。さすがにその時は、熱心に聞いて下さったが、僕の報告を終るなり、先生は、

「それじゃ、自殺と考えても差さしつかえ支つかないね。若しそれが他殺だったら、たしかに奇蹟だ」と、言われた。

ところがK君。その奇蹟であることが、皮肉にも、それから一時間の後に起つたのだ。といつては少し言い方が変だが、実は、福間警部がたずねて来て、容疑者の緑川順が、北沢を殺したことを自白したから、毛利先生に警視庁へ来て、緑川を訊問して、その精神鑑定をしてほしいと頼みに来たからである。

これをきいた毛利先生の態度は急に一変した。先生はその瞬間に以前の毛利先生となつたのである。「他殺だったら、たしかに奇蹟だ」と断定されたほど、他殺説の割りこむ余地のない事情のところへ、他殺を自白したのだから、毛利先生は急に興味をもつてみずから、取調べて見ようという気になられたにちがいない。

「福間君。緑川の自白したことを、まだ北沢未亡人には告げないだろうね」

「告げません」

「よし、それではこれからすぐ出かけよう」

僕等三人はやがて警視庁へ自動車をとばせた。自動車の中で毛利先生は、福間警部に向つて、緑川の自白の趣おもむきをたずねられた。警部の話したところによると、かねて彼は北沢夫

人と恋愛関係をもつて居たが、北沢夫人から、北沢がピストルを買ったこと、冗談半分に文学者A氏の遺書の一節をうつして持つて居ることをきき、自分も同じピストルを買つて、夫人に内証に北沢を亡きものにしようと思ひ、その日、夫人が買物に出かけた後、ひそかにしのびこんで書齋へ行くと、北沢は椅子に腰かけて食後の微睡びすいをして居たので、これ幸いと、うしろにしのび寄り、自分のピストルで射殺し、たおれるのを見すまして、手にそのピストルを握らせ、それから机の抽斗から、北沢のピストルと遺書を取り出し、ピストルはポケットに入れ、遺書は机の上に置いて、再びのび出たというのであつた。

「緑川はどこに住すまつて居るのかね？」と、毛利先生は警部の説明をきき終つてたずねられた。

「北沢家から、四五町へだつたところに小さな文化住宅をかまえ、一人で住んで居るのです」

警視庁へ着くなり、毛利先生と僕とは一室にはいつて、緑川の連れられてくるのを待た。

やがて福間警部につれられてはいつて来たのは二十四五の、顔の長い、髪の毛の房々とした青年だつた。毛利先生は何思つたか福間警部を別室に退しりぞかせて、緑川に犯行の模様を

語らせた。それは、福岡警部が自動車の中で告げたことゝ少しも変らなかつた。

「それでは、この机の前で、その時の北沢さんの模様をやつて見せて下さい」

と、毛利先生は立ち上つて、自分の腰かけて居た椅子を緑川に与え、室の隅にあつた薄^う縁^{すべり}をもつて来て床に敷かれた。

緑川はおそろしく椅子に腰かけた。

「さあ、眼をつぶつて微睡して居る様子をして下さい。僕がその時のあなたの役をつとめます。よろしいか。そら、ドンとピストルを打つた。そこで北沢さんはどうしましたか」

「何しろ興奮して居たから、こまかい動作はよく覚えて居りません。たしか、こういう風に立ち上つたと思います。それから、たしか身体を、こう振^ねじて、下へたおれ、こういう風に横^{よこた}わりました」

こう言つて一々その動作を示した。

「宜^{よろ}しい。恐入りますが、もう一度やつて見て下さいませんか」

更に再び実験が行われた。

「横わつた時の姿はそれに変わりはありませんか」

「それはたしかに記憶して居ります」

「よろしゅう御座います。元の部屋へお帰り下さい」

こう言つて先生は福間警部をよんで緑川を連れ去らせた。

「涌井君。君は昨日北沢家へ調べに行った時、福間警部に北沢がどんな風に死んだかを演やつて見せたね」

「はあ」

「そうだろうと思つた」

やがて福間警部が戻つて来ると、

「福間君。白状というものは、こちらから教えてさすべきものでないよ。むこうの言うことを黙つてきけばいいのだ」

「緑川が何か言いましたか」

「いま緑川に実演させたら、君が教えたとおりにやったゞけで本当のことをやらなかったよ。あんな飛び上り方なんて、まったく嘘だ。たゞ、横わつてからは本式だった。本人も、飛び上つてから、身体を振じてたおれるまでは、どうも興奮してよく覚えて居りませんと言いなから、横わつた姿だけはずきり覚えて居るんだ。緑川の自白は虚偽だよ」

「それでは何故そんな虚偽の自白をしたのでしょうか」

「それは、あとでわかるよ。未亡人をつれて来てくれたまえ」

間もなく黒い洋装の喪服を着た北沢未亡人が連れられて来た。眼の縁が際立って黒かったので、一層チャーミングに見えたが、さすがに、三十過ぎであることは皮膚のきめにかゞわわれた。

例によつて福間警部が退くと、先生は、

「あなたは、御主人が自殺された日、何時に用たしから御帰りになりましたか」

「五時半頃だったと思います」

「そうではないでしょう。四時か四時半頃だったでしょう」

「いゝえ、たしかに五時……」

「本当のことを言つて下さい。こちらには何もかもわかつて居るのですから」

「……………」

「あなたは、四時頃に帰つて死骸を発見し、びっくりして緑川さんのところへかけつけ、それから緑川さんをよんで来て、二人でとくと相談して、はじめて警察へ御知らせになつたでしょう」

「いえ……」

「だから、緑川さんは、あなたが御主人を殺しなされたにちがいないと思いこみ、あなたをかばうために、今日、自分が殺したのだといって白状されましたよ」

この言葉に彼女はぶるツと身をふるわせて、

「それは本場で御座いますか。それでは何もかも申し上げます。まったく仰せのとおりで御座います。緑川さんが殺したのでもなく、また私が殺したのでもありません。私が四時に帰ったとき、すでに良人は死んで居りました。そうして私は一時に家を出て、それまで緑川さんのところに居たので御座います」

「よろしい。あなたの今言われたことを真実と認めます」

こう言つて、毛利先生は警部をよんで夫人を連れ去らせた。

「涌井君」と、先生はさすがに喜ばしそうに言われた。「まこと真実を知ることが、案外に楽なときもあるね。僕は緑川の実演で、彼が死骸を見せられたにちがいないと推定したのだが、果してそうだった。それにしても、恋は恐ろしいものだ。夫人の罪を救おうとして虚偽の告白をなし、敢て自分を犠牲にしたのだ」

K君。僕は今更ながら先生のけいがん炯眼に驚かざるを得なかった。先生の前には、「虚偽」はつねに頭を下げざるを得ない。

「さあ」と先生は腕を組んで言われた。「これで、二人には罪がないとわかり、北沢は自殺ときまつたが、さて、何だかまだ事件は片づいて居ないではないかね」

「はあ」と、返事をしたものの、僕にはさっぱり見当がつかなかった。

福岡警部がはいつてくると、先生は訊問の結果を告げ、二人を放免すべきことを主張せられて、そうして最後に、

「昨日、僕は立入ってはきかなかつたが、一たい北沢事件の今度の再調査は、警察へ来た無名の投書がもとなつたというではないかね」

「そうです」

「君は、その投書について調べて見たかね」

「いゝえ、投書はありがちのことですから、別に委しいことは調べませんでした」

「その投書はまだ保存してあるだろうね」

「あります、持って来ましょうか」

警部は去つて、間もなく葉書をもつて来た。そこには、「北沢栄二の死因に怪しい点がある」と、ペンで書かれてあつたが、僕はそれを見た瞬間、はツと思つて、先生の顔を見ると、先生の眼はすでにぎら／＼輝いて居た。

「涌井君。遺書を出したまえ」先生は遺書と投書の筆蹟を見くらべられたが、「この遺書と投書とは、同じ日に、同じペンとインキで、同じ人によって書かれたものだ※」

K君。

その瞬間、僕は、たしかに一種の鬼気というべきものに襲われたよ。福間警部も、あまりの驚きで暫らくは言葉が出ないらしかった。

「福間君。御苦労だが、もう一度北沢夫人を連れて来て下さらぬか」

警部が去るなり、僕は言った。

「先生、それでは、北沢氏自身が、二人を罪に陥れるために、そのような奸計かんけいをめぐらしたのでしうか」

「それならばもつと他殺らしい証拠を作つて然るべきだ」

「他殺らしい証拠を作つては却つて観破される虞おそれがあるから、投書の方だけを誰か腹心の人に預けて置いて、あとで投函してもらつたのではないでしうか。現に、遺書を自作にしなければならぬのも、やはり、深くたくんだ上のことではないでしうか」

「そうかも知れない。けれど、北沢という人が、果してそういうことの出来得る人かしら。とに角、夫人にきいて見なければわからない」

夫人が連れられて来ると、先生は、遺書を示して、それが果して御主人の筆蹟であるかどうかをたずねられた。

夫人は肯定した。すると、福間警部も、北沢の他の筆蹟と較べたことを告げ、なお証拠として持つて来てあつた二三の筆蹟を取り出して来て示した。

先生は熱心に研究されたが、もはや、疑うべき余地はなかつた。遺書も投書も、北沢その人が同時に書いたものである。

「この遺書を御主人が書かれたのは、いつ頃のことですか」

「たしか、死ぬ二十日程前だつたと思います」

「どこで書かれましたか」

「それは存じませんが、ある晩私にそれを見せて、もうこれで、遺書かきわきが出来たから、いつ死んでもよいと、冗談を申して居りました」

「すると、自殺をなさるような様子はなかつたのですか」

「少しもありませんでした。平素比較的快活な方でしたから、まさかと思つて居りました」

「ピストルはいつ御買いになりました」

「その同じ頃だと思ひます。強盗が出没して物騒だからといって買いました」

「御主人は平素巫山戯たことを好んでなさいましたか」

「何しろわがまゝに育つた人で、たまには巫山戯たことも致しましたが、時にはむやみにはしやぐかと思えば、時にはむつつりとして二三日口を利かぬこともありました」

「御主人には、親しい友人はありませんでしたか」

「なかつたと思います。元来お友達を作ることが嫌いで御座いまして、自分の關係して居る会社へもめつたに顔出し致しませんでした。たゞM——クラブへだけはよく出かけた」

「M——クラブというと？」

「英国のロンドンに居たことのある人たちが集つて組織して居る英国式のクラブで、丸の内に御座います」

これで毛利先生は訊問を打ちきつて、未亡人を去らせ、

「いくらたずねて行つても、わかるものでない」と、呟くように言われた。

「それでは、投書の主をたずね出して見ましようか」と、福間警部が言った。

「いま、たずね出したところが、自殺説が變るわけのものではないし、又、むこうから名乗つて出ない限りはたずね出せるものでもなからう。とに角、これで事件は片づいたよ」

K君。

かくて北沢事件はとに角片づいた。それは新聞で君も御承知のとおりだ。けれども片づかぬのは先生の心だった。再び従前の活動状態に戻られた先生としては、事件の底の底までつきとめねばやまれる筈がない。「むこうから名乗って出ない限りはたずね出せるものでもなからう」と言われたものゝそれは警察に向つての言葉であつて、先生にはすでにその時、たずね出せる自信があつたに違いない。そのみならず先生は、その事件の真相を警察に知らせては面白くないとさえ直感されたらしい。

警視庁を去るとき、

「この遺書と投書を暫らく貸してもらいたい。少し研究して見たいから」

と言つて、先生はその二品を持つて教室へ歸られたが、やがて僕を教授室に呼んで、

「涌井君、君はどう考える」と、だしぬけに質問された。

僕が何と答えてよいか返事に迷つて居ると、毛利先生は説明するように、

「単に警察に投書があつたというだけなら、無論詮索する必要はないのだ。又、たとい、死んだ本人の自筆の投書であつても、これまたさほど珍らしがらなくてもよいことだ。世の中には随分悪戯ふざけ気の多い人もあるから、大に警察を騒がせて、草葉の蔭から笑つてやろ

うと計画する場合もあるだろう。また、遺書が自作の文章でなくて、他人の引き写しであってもこれも、別に深入りして詮索するに及ばぬことだ。こうした例はこれまでにものななく、沢山あった。ところがこの二箇の、詮索を要せぬ事情が合併すると、そこに、はじめに詮索に価する事情が起つて来るのだ。この場合自殺者が、遺書と投書とを同じ時に書いたということは、少くともある目的、而も、^{しか}たつた一つの目的のために書かれたことになる。従つて、その目的を詮索する必要が起つて来るのだ」

「その目的はやはり、夫人と愛人とを罪に陥れるためではなかつたでしょうか」

「それならば、もつと他殺らしい証拠を造つて然るべきだ」

「それでは、単なる人騒がせのための悪戯でしょうか」

「悪戯としては考え過ぎてある。現にこの投書は、今少しのことで捨てられてしまうところだった。この投書を見なかつたならば、僕もこのように興味を持たない筈だ」

K君。まったく僕にはわからなくなつてしまった。そうして、毛利先生にも、その時はまだ少しもわかつては居なかつたのだ。

「この謎はとても短時間には解けぬよ。君はもう帰つてもよい。僕はこれからこの二品を十分研究して見ようと思う」

K君。

かくて僕は、可なりに疲労して家に帰ったが、先生から与えられた謎が頭にこびりついて、その夜はなか／＼眠れなかった。僕は色々に考えて見た。はては文学者A氏の全集を繙ひもとき、その遺書の第一節の文章なり意味なりから、何か解決の手がかりは得られないかと詮索して見たが、結局何も得るところはなかった。

あくる日、睡眠不足の眼をこすりながら、教室へ行くと、先生はすでに教授室に居られた。その顔を見たとき、先生が徹夜して研究されたことを直感した。

「涌井君、遂に問題は解けたよ」

僕の顔を見るなり、先生はいきなり声をかけられたが、いつもの問題の解けた時のような、うれしさがあらわれて居なかつたから、何か先生にとっては不愉快な解決だなど思つた。

「解けましたか」

そう言ったとき、僕は次の言葉に窮した。「それは愉快です」とは、どうしても言えなかつたのだ。すると先生は、机の上にあつた小さな紙片をとり上げて、

「之がその解決だよ」と言つて渡された。見ると其そこ処には、

P M b t D K

と書かれてあつた。

「君、甚だ御苦勞をかけるが、それを都下のおもだつた新聞に、あまり目立たないように
はなは
広告してくれたまえ」

僕は面喰つた。

「これは暗号で御座いますか」

「理由^{わけ}は君が帰つてから話す」

僕はそのまゝ黙つて引きさがり、それから各新聞社をまわつて広告を依頼し、教室へ帰つたのは午後一時ごろだつた。道々僕は、先生の渡された暗号——無論僕ははじめそれを暗号だと思つた——を、色々に考へて解こうとしたが、まるで雲をつかむようだつた。又、何のために、先生が新聞などへ広告を出されるのか、そうして、これが一たい北沢事件と、どう関係があるのか、ちつともわからなかつた。だから、教室へ帰つたときは、早く先生から説明がきゝたくて、僕はいわば好奇心そのものであつた。

教授室に入ると、先生は立ち上つて、入口の方へ歩いて行き、扉^{ドア}の鍵孔に鍵を差しこんでまわされた。

「あまり大きな声で話してはならぬのだよ」こう言つて再び机の前まえに腰をおろし、「さて涌井君、君はニーチェを読んだことがあるか」と、だしぬけに質問された。

「はあ。以前に読んだことがありますけれど……」と、僕がしどもどしながら答えると、先生は遮さえぎつて、

「無理もない。今どきニーチェなどを語るのは物笑いの種かも知れぬが、若もしそれが天才の仕事であるならば、たとい非人道的であつても、君は許す気にはならぬかね」

「さあ、そうですね……」

「いきなり、こう言つては君も返答に迷うであろうが、近頃はよく民衆の力ということが叫ばれて居るけれど、少くとも科学の領域に於ては、幾万の平凡人も、一人の天才に及ばぬことを君は認めるであろう」

「認めます」

「そうして、科学なるものが、人間の福利を増進するものである以上、科学的天才の仕事が非人道的であつても、君はそれを許す気にならないか」

誠に大問題である。

「もつとよく考えて見なくてはわかりませんが……」

「その肯定が出来なくては、君に先刻さつきの約束どおり、説明を行うことが出来ぬ」

それでは大変だ。是非、北沢事件の解決をきかねばならぬ。

「許してもよいような気がします」

「よし、そんなら説明に取りかゝろう」と、案外先生は楽に話しかけて下さった。「ゆうべ僕は、この二枚の紙片をにらんで、とうとう徹夜してしまった。だんく推理を重ねていった後、比較的早く事件の底にかくされた秘密を知ったけれど、その確証をにぎるのに随分苦心した。」

「僕は昨日君がかえってから、この二つの品即ち遺書と投書を、机の上にならべて、如何なる順序で研究すべきかを考えた。その結果、最初は先ず、心を白紙状態に還元して、果してこの二つの筆者が北沢その人であるかどうかを研究した。けれども、もはやそれには疑いの余地がなかった。いろいろ北沢の他の筆蹟とくらべて見たが、絶対に他の人であり得ないことがわかった。」

「然らば、北沢は何故にかゝる計画を行ったか、何の目的でやったことかを次に研究した。これこそ謎の中心点で、すでに君と話し合っても見たが、遂に昨日は解決が出来なくて別れてしまった大問題だ。昨日も言ったとおり、遺書と投書と別々にしては、色々の目的が

考えられるけれど、二つを合せるとたった一つの目的しか考えられなくなるのだ。従ってそのたった一つの目的をさがし出せば凡ての事情が氷解するのだが、何がきて、たったこの二つきりの品によつて解決しようとするのだから、なか／＼困難だった。

「北沢が何人に投書を依頼したかはわからぬが、とに角、投書は北沢の計画したとおりに投ぜられたにちがいない。ロマンチックな君は、きつと、北沢の投書の依頼を受けた人が誰であるかを知りたく思うであろう。その人を捜し出して、その人から北沢の真意をき、度く思うであろう。無論あの投書が、偶然に無関係な人の手に入ったとは考えられないから、たしかに北沢に依頼された人がある筈だ。そうしてその人は、現にどこかで、警察や僕等の騒ぎを頬笑みながら覗つて居るにちがいない。それを思うと、君は腹立たしい気になるかも知れぬが、僕は然し、北沢が投書を依頼したという人には毫も興味を感じなかつたのだ。それよりも北沢の唯一の目的が知りたくてならなかつた。

「而もその目的は、決して単なる人騒がせのためではない。何となれば、若し単なる人騒がせが目的だったら、もつと簡単な、そうしてもつと効果的な方法がある筈だ。だから北沢にはもつと厳肅な一つの目的があらねばならなかつたのだ。

「ところが、そのような大切な目的を果すためには北沢の計画はすこぶるあやふやなもの

だった。それは昨日も言ったごとく、若し僕が注意しなければ、投書はあやうく捨てられてしまふところだった。自殺を敢てしてまで果そうとする大切な目的を遂行するに於ては、随分乱暴な計画であつて、それは到底手ぬかりなど、言つてはすまされぬことである。「して見ると、この投書の危険もあらかじ予め計画のうちに入れられてあつたと考えねばならない。すると北沢は、その投書が当然僕の目に触れることを予定して居たと考えねばならない。いゝかね、涌井君、いまこうして話してしまえば何でもないのであるが、僕がこの推理に達するまでには、かなりの時間を費したのだ。

「遺書に自作の文章を書かなかつたのは、警察に埋葬の許可しか与えさせぬ計画だった。これは疑うべき余地はないが、投書を警察へ送れば再鑑定が行われ、当然、僕が、その投書と遺書が同一人おなひとによつて同一の時に書かれたことを発見するということも、今は疑うべくもない、予定の計画だったのだ。

「即ち北沢は、僕が投書と遺書の同一筆蹟なるところから興味をもつて研究に携たずさわり、その結果、その目的が何であるかを発見するに大に苦しむということもやはり、予定して居たのだ。涌井君、君は定めしこの言葉を奇怪に思うであろうが、投書が僕の手に入ることを確認した北沢のことであるからそれくらいのことを予定するのは何でもないので。つま

り、一切の事情は、北沢の計画どおりに運んだ訳なのだ。換言すれば、北沢はすでにその目的を果したことになるのだ。

「いゝかね。僕が一生懸命になつて詮索した北沢の目的は、僕に北沢の目的を詮索させることにあつたのだ。

「然らば次に起る問題は、何故に北沢が、それだけの簡単な目的のために自己の生命までも奪つたかと言うことだ。北沢という人は、今回の事件ではじめて僕に交渉をもつただけで、少くとも生前にはあかの他人であつた。その人が、そのようなことをするとは、あり得ないことだ。

「その、あり得ないことがあるについては、そこに、それを正当に説明し得る理由がなくてはならない。そうしてそれを説明し得る唯一の理由は、北沢自身が、少しもそれを知らないということではなくてはならない。つまり北沢自身投書と遺書とを書いた目的を少しも知らなかつたというより他にないのだ。

「しかも、投書と遺書とは北沢自身の筆蹟である。して見れば、この二つを北沢は無意識の状態で書いたにちがいない。然るに遺書は生前すでに夫人に示したくらいであるから、北沢自身は書いたことを意識して居た筈である。すると北沢は無意識に書いて置きながら、

意識して書いたように思つて居たと考えねばならぬのだ。

「涌井君。無意識で書いて、それを意識して書いたように思うのは、催眠状態に於て書かされ、あとでそれを意識して書いたつもりになるよう暗示された時に限るのだ。して見ると、北沢は、ある人のために無意識に書かされ、そうして暗示を与えられたと考えねばならなくなつた。

「こうして、僕の推理の中にはじめて第三者がはいつて来たよ。つまり、北沢事件に、今迄ちつとも顔を出さなかつた人が顔を出すに至つたのだ。そうして、その第三者こそ僕に北沢の投書と遺書とを詮索させようとしたのであつて、その人が、今まで北沢が行つたとして話して来た計画をこと／＼く立てたわけである。そうして、北沢自身はそれについて少しも知らなかつたのだ。

「涌井君。その第三者とはそも／＼誰だろう。先ず他人の遺書の文句をうつした遺書を書かせて、死骸を埋葬させ、然る後、同一筆蹟の投書を警察へ送つて再鑑定を行わせ、自殺であることを確証せしめて、たゞ僕のみがその投書を見て事件の謎をつきとめるために努力することを予想して居た人は誰であろうか。何のためにその人は僕に徹夜せしめるような苦心をさせたか。

「涌井君。君はもう、それが誰であるかをおぼろげながら察し得たであろう。けれども、その人であると断定すべき証拠が、一たい何処にあるのか、その時僕は考えたのだ。これほどまでの計画を立てる人のことであるから、必ずその証拠となるべきものが、どこかにこしらえてあるにちがいないと想像したのだ。而も、^{しか}恐らくは、この投書と遺書の二つの中にその証拠がかくされてあろうと思つたのだ。

「そこで僕はあらためて二つの品を検査しはじめたのだ。たとえば投書の文句が^キ解^イ式となつて、遺書の方から何かの文句が出て来るのではあるまいかというようなことも考えて見たのだが、そのような形跡はなかつた。そこでこんどは遺書の文句即ちA氏の手記の第一節の文句の中に何かの意味が含ませてあるのではないかと、色々研究して見たが、そうでもなかつた。ところがやつと^{あけがた}暁方に至つて、とうとう、遺書の中から、確実な証拠を握るに至つたよ。

「涌井君。君はよく記憶して居るだろう。先般の学会に、僕と狩尾君とが激論したことを。その時、たしかに僕は受太刀だった。すると狩尾君は『毛利君如何です』と皮肉な口調で僕に肉迫して来た。その時、僕は『人間について直接実験を行わない限り、君の説に服することは出来ぬ』と言つて討論を終つた。そうして僕は、その後人間に関する研究は、^ひ畢

つぎよう
竟 人間実験を行うのでなくては徹底的でないと考え、それが不可能事であることを思
つて、前からの憂鬱が一層はげしくなったのだ。

「ところが、狩尾君は遂にその人間実験を敢てしたのだ。北沢は君の解剖によると胸腺淋
巴体質であったから、狩尾君は彼が、そのうちの自殺型に属して居ることを知り、而も狩
尾君の所謂、『特別の時期』にはいつて居たのであろう。それを知った狩尾君はその所
謂 incendiariam を行つて、北沢を自殺せしめ、もつて、僕にその説のたゞしいことを示し
たのだ。

「北沢が自殺する以前には、少しも自殺しやしないかという虞おそれのある徴候はなかつた筈だ。
若しあるならば、ピストルを買つたり、遺書を書いたりしたので、夫人は警戒せねばなら
ない。して見ると毫すこしも精神異常の徴候はあらわれて居らなかつたのであつて、そのような
時機にはたとい暗示を与えても自殺をせぬというのが僕の説なのだ。ところがそれを狩尾
君は人間実験で破つたのだ。そうして、それを僕にさとらしめるために、遺書と投書の計
画をたてたのだ。

「未亡人の話によると、北沢はM——クラブへよく行ったということであるが、ロンドン
を第二の故郷とする狩尾君がそのメンバーであることは推定するに難くない。恐らく狩尾

君はそこで自分にとつてもあかの他人である北沢を観察し、催眠状態のもとにA氏の手記をデイクテートし、なお投書の文句を書かせて、それだけは自分で保存して置いたのである。ピストルを買わせたのも狩尾君かも知れぬ。そうして、みごとに自説を証明し、併せてそれを僕に示そうとする目的を達したのだ。勿論、その遺書や投書やピストルが、*condarism* の役をつとめたことはいふ迄もなく、北沢事件そのものは、実に天才的科学家の行つた人間実験に外ならぬのだ」

こゝまで語つて先生は、ほつと一息つかれた。僕は先生の推理のあざやかさに、いわば陶然として耳を傾けて居たが、最後のところに至つて、ひやりとしたものが背筋を走つた。

「それでは先生、たとい直接手を下されずとも、北沢は狩尾博士が……」

先生は、手真似で「静かに！」と警告された。「だから、はじめに君にことわつてあるではないか。狩尾君は天才だよ。到底僕の及びもつかぬ段ちがいの天才だよ。こうして思ひ切つた実験は、アカデミックな考え方にとらわれて居る僕等の金輪際為し得ざるところだ。それは世間普通の考え方から言えば、悪い意味にもとれるが、とに角、科学によつて自然を征服して行こうとするには、これくらいのことを平気でやつてのけねばなるまい。

「いや、このことについては、これ以上深入りしては論ずまい。それを論ずべく、僕はあ

まりにつかれて居る。だから、最後に、僕が遺書の中から発見したという証拠について語って置こう。

「見たまえ。この遺書の文字はすこぶる綺麗に書かれてあるが、よく見ると、ところ／＼に、棒なり点なりの二重な、即ち一度書いた上をまた一度とめた文字があることに気づくだろう。僕はそこに目をつけて、その文字を拾って見たのだ。即ち、

……書いたものはない。……の……も

……よるものであろう。……の……う

……はつきりこの……の……り

……特に君に伝えず……の……君

……描いている。……の……い

……自殺するかを……の……か

……が、少くとも……の……が

……不安である。……の……で

……信用することは……の……す

の九字で、これを合わせて読むと、「もうり君いかゞです」となる。この言葉を発するの

は、狩尾君より他にないではないか。

「そこで僕は、その狩尾君の呼びかけの言葉に対して、返事を書いたのだ。それが、君を煩わした、新聞広告の文字なのだ。P M b t D Kとは、別に暗号でも何でもなく、

Prof. Mohri bows to Dr. Kario.

の最初の一字ずつをとったのだ。無論狩尾君の眼にふれれば、すぐその意味を知ってくれるだろう。僕としては、これが、今の僕の心の全部だ」

K君。これで北沢事件は真の解決を得たのだ。

このことがあつてから、毛利先生は、ずっとその快活な状態を続けて居られたが、それから二週間たゝぬうちに、突然狩尾博士の脳溢血による頓死が伝わると、先生は以前にまさる憂鬱に陥つてしまわれた。

学者がその論敵即ち闘争の対象を失うほど寂しいことはない。多分先生の憂鬱もそのためであつたと思うが、それは実に極端な憂鬱であつた。そうして遂に肺炎にかゝつて、狩尾博士のあとを追つてしまわれた。

かくて、日本は、得がたき俊才を一度に二人失つたのだ。こうした花々しい闘争がいつになつたら再び行われるか、いつになつたら精神病学が、再びこのように進められて行く

かと思うと心細くてならぬ。今この事件を書き終ってふりかえって見ると、それが幾世紀も昔の出来事のような気さえする。K君、健在なれ！

（〈新青年〉誌昭和四年五月号発表）

青空文庫情報

底本：「日本探偵小説全集」 黒岩涙香 小酒井不木 甲賀三郎集」 創元推理文庫、東京
創元社

1984（昭和59）年12月21日初版

1996（平成8）年8月2日8版

初出：「新青年」

1929（昭和4）年5月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：網迫、土屋隆

校正：川山隆

2005年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

闘争

小酒井不木

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>